

総合教育センター
学生向け情報誌

クレードル 26号

CRADLE

Center for Research And Development of
Liberal arts Education
26th issue

全学教育推進機構 総合教育センターの新しい仲間です

はじめまして p.2

橋本 あかね(総合教育センター)

着任のご挨拶 p.3

山本 佳世子(総合教育センター)

学問とは……

正義感が強すぎる人は法学に向かない(1)

——コロナ禍における《自粛警察》—— p.5 小関 康平(総合教育センター)

20回目の「森に生きる」始動

ローカリーアクト天理 SDGs「森に生きる」

フィールドワーク講評 p.7

佐竹 靖(近畿大学)

心の健康法 21

「マイペース」と「マイスペース」を大切に！ p.8

仲 淳(総合教育センター)

はじめまして

総合教育センター 橋本 あかね

2024 年 4 月に天理大学人文学部総合教育センターに着任しました、橋本あかねと申します。まだ新しい環境に慣れることに精一杯の毎日ですが、どうぞよろしくお願いいたします。

さて、自己紹介ということで、普段は授業でしかお話ししない私の来歴と研究についてお話しします。私は幼稚園の頃から「学校」という場所になじめない子どもで、特にみんなで遊ぶことが苦手でした。集団行動が苦手というより、一人でいたいときに一人でいさせてもらえないことに苦痛を感じる子どもでした。なので、小学校に入ってもみんなで遊ぶことが求められる休み時間はとても憂鬱で、「早く授業が始まればいいのにな…」と毎日のように思っていました。それでも、学校には病気のとき以外休むことなく通い、中学校三年間は皆勤でした。ところが、それまでの無理がたたったのか、高校 2 年生のとき、ついに学校に行けなくなりました。それまで好きだった勉強にも意味を見出せず、何のために学校に行くのかが分からなくなり、いっそ学校をやめてしまおうかとも考えました。それでも、大学へは行くものだと思っていた私は、「大学に行くためには高校を卒業しないと」と考え、重い身体と心を引きずって再び学校に通い、先生方の配慮もあって留年することなく無事に(?)卒業しました。

当時の私にとっての居場所は、課外活動でした。ユネスコ協会という民間団体の活動に参加していたのですが、在籍している学校の枠を超えて同世代や大学生の人たちと交流できることがとても楽しく、毎回ワクワクしながら参加していました。活動のなかで知った世界寺子屋運動（世界のすべての人々が読み書き計算をできるように支援する活動）は教育に関心を持つきっかけになりました。とはいえ、教育学＝学校の教師というイメージしかなかったため、教育学部への進学は視野には入らず、最初に入った大学では文学部の日本語日本文学科を選びました。ところが、日本語教育概論（日本語を母語としない方に日本語を教えるための基礎を学ぶ授業）という授業を受けたことで、ふたをしていた教育への関心がムクムクと湧き上がり、と同時に、「今の学部学科で卒論を書くことは想像できないな」と思うようになりました。そして、教育学に転向することを決めた私は、約 1 年間の猛勉強（おそらく人生で一番勉強したのがこのときです）の末、3 回生から別の大学に編入しました。

編入をきっかけに始めたのが、学校外の学び・育ちの場であるフリースクールでのボランティアです。ボランティアといっても、そこに来ている子どもたちとたわいもない会話をしたり、のんびり過ごしたりしている時間がほとんどで、最初の頃は「私って子どもたちの役に立っているのだろうか？」と自問自答する日々でした。それでも、回を重ねるごとに私が来るのを楽しみにしてくれる子どもたちが少しずつ増え、週に 1 度のボランティアが待ち遠しく感じるようになりました。

4 回生になると卒論が待っているわけですが、当時の私の頭の中はフリースクール一色で、それ以外のテーマで書くことは到底考えられませんでした。ということで、フリースクールをテーマに卒論を書き、それ以降、フリースクールが私の研究テーマとなっています。ただ、私の場合、子どもではなくフリースクールに関わる大人に焦点を当てて研究をしているので、そこが他の研究者とは違うところかなと思っています。大学院生の間は、フリースクールを

立ち上げた「設立者」と呼ばれる人たちにインタビューをし、設立者たちはなぜフリースクールを設立し、財政的な援助もない状況で運営を続けているのかという問いを、設立者の人生においてフリースクールがどのような意味を持つのかという視点から明らかにしてきました。最近では、フリースクールの職員に焦点を当て、職員の養成や職員のキャリアのなかでのフリースクールの位置づけについて明らかにしようとしているところです。



また、共同研究で、フリースクールの運営にお金の面からアプローチすることとしています。財政難を理由に閉鎖されるフリースクールも多いなか、運営を続けているフリースクールはどんな戦略を立てているのか、設立から現在までの苦労話も含めてまとめたのが、『不登校の子どもとフリースクール』です。教育学ではタブーとされがちなお金の問題にリアルに迫った 1 冊となっています。

今は大学での仕事がメインになっているため、特定のフリースクールに深く関わることはしていないのですが、関心のあるフリースクールには遠くても足を運ぶようにしています。なぜなら、フリースクールは一つひとつがまったく異なる存在で、同じものはないからです。フリースクールを訪れるたびに新しい発見があるというのが、この分野の醍醐味だと思っています。興味を持たれた方は、ぜひお近くのフリースクールに足を運んでみてください。見たことのない、新しい世界に出会えますよ。

こんな感じで学校があまり好きではなく、研究テーマも学校以外の私ですが、何のご縁か教職課程に携わっています（一応教員免許は持っています）。授業でも、批判的な視点で話すことが多いかもしれませんが、自論は「学校好きな先生ばかりではおもしろくない！」なので、ぜひいろんな方に教員を目指していただければうれしいです！

着任のご挨拶

総合教育センター 山本 佳世子

2024 年 4 月に天理大学人文学部に着任しました山本佳世子です。2024 年 3 月までは医療学部にも所属していました。天理医療大学時代から計 7 年、医療学部で、医療系の国家資格を持たない唯一の人文社会系教員として、主に総合教育科目や専門共通科目を担当していましたが、この 4 月より、全学の総合教育科目を担当させていただくことになったというわけです。どうぞよろしくお願いいたします。

実は 4 月に着任して以来、人生で初めて、「男性の方が圧倒的に多い」という環境に身を置いています。小中高は男女半々、大学は女子大、最初の就職先は受講生のほとんどが女性、医療大は学生も教員も女性が多く、非常勤講師も看護系がほとんどだったため、学生のほとんどが女性でした。それが今年度、新たに担当させていただくことになった科目の中には、

履修者が全員男子学生という科目もあり、新鮮な日々を送っています。

そんなことも含め、慣れないことも多いですが、一方で、久しぶりの「文系大学」の雰囲気懐かしさも感じているところです。

【来歴など】

私は小学生の頃から「将来の夢は研究者！」と言っていた子どもでした。興味関心を突き詰めていった先に研究者という職業があるのだと思うのですが、私の場合、突き詰めたい興味関心よりも、研究者という職業が先にありました。夢は叶ったわけですが、変わった子どもだったなと、思います。

大学は女子大でした。当時は「この男女平等の時代に女子大なんて」と思ったりもしていましたが、今振り返ってみると、守られていたのだなと、つくづく思います。現にジェンダーギャップの大きい日本社会において、女であることを気にすることなくのびのびと過ごせた貴重な4年間でした。そんな大学には、歴史が好きで、歴史を学びたくて入学したのに、専攻を選ぶ際に、なぜか「哲学・倫理学・美術史コース」に進み、日本倫理思想史を学びました。にも関わらず、大学院では現代社会における倫理について研究したいと進学したところ、死生学に出会い、修士・博士論文のテーマは「生と死の教育」になりました。大学院生の頃、病院で活動する宗教者たちに出会い、彼らに誘われてスピリチュアルケアの研究会に参加するようになり、スピリチュアルケアの実践・人材養成に関わるようになり、それが現在の研究テーマになっています。

現在の専門は「死生学」です。高校生の頃には想像もしていなかった分野で、一見ブレまくりなわけですが、私の中では「日本人の死生観」というテーマで実は一貫しています。

【研究テーマなど】

「死生学」とは、簡単に言うと「どう生き、どう死ぬか」を考える学問です。人間とは死すべき存在である、ということ的前提に、そんな人間のあり方、生きることの意味等を探究するものです。その中でも私自身はスピリチュアルケア、グリーフケア、生命倫理、生と死の教育などの教育・研究に携わっています。生老病死の問題に向き合う中であらわになる「日本人の死生観」を描き出したいと願っています。

病や死といった人生の危機において、人生の目的や意味を失い、あるいは死への不安を抱える人たちがいます。そうした人々に寄り添い、彼らの生を支える営みをスピリチュアルケアと呼びます。欧米等では主に宗教者が担ってききましたが、日本人の多くは「無宗教」を標榜しています。日本においては、どのようなスピリチュアルケアがありうるのか。「非宗教者によるスピリチュアルケア」や、「宗教者による非信者への宗教的ケア」について検討してきました。それは「日本人の“無宗教”的死生観」とは何なのかを探究することでもありました。現在は、病院での「死者へのケア」に注目しています。「病院は死者をいかに遇することができるか」を検討しています。



授業においても、学生が「どう生き、どう死ぬか」を考え、自身の死生観を見つめ直す時間になればと取り組んでいます。まさに「生と死の教育」の実践です。死にゆくまでの生をいかに生きることができるか、共に探究していけたらと考えています。

正義感が強すぎる人は法学に向かない（１）

——コロナ禍における《自粛警察》——

総合教育センター 小関 康平

コロナ感染症が２類感染症相当以上の「新型インフルエンザ感染症」の分類から、「５類感染症」の分類に引き下げられてから、今春で１年以上が経過した。大混乱の３年間は、一応のところ、その幕を閉じ、本学においても、あるいは、全国各地においても、いつもどおりのキャンパスライフが息を吹き返したことになる。

あの暗黒の３年間では、感染予防・人流抑制のために、マスク着用が強く奨励されたり⁽¹⁾、あるいは、商店・飲食店などにおかれては、様々な営業上の規制——事実上の規制を含む——が設けられたりするなどした。そのために、必然的に憩親の機会は減り、人々のコミュニケーションは、どこことなく、ぎこちなくて、よそよそしくて、緊張感のあるものと化していった。

そうした只中において、次のようなトラブルが世間には少なくないことを知った。すなわち、自粛要請に応じない商店・飲食店などに対して恫喝・罵倒的文言を落書きしたり、地元ナンバー以外の車両を損壊したり、あるいは、マスクを着用していない人に対して執拗な非難を浴びせたりといった行為である。こうした行為は、ネットスラングで《自粛警察》と称されるようになった。当然に、これは、民事上の不法行為責任を問われうるだけでなく、刑事犯罪をも構成しうるものでもある。

ただ、より恐ろしいのは、行為それ自体というよりも、それを支える思想性である。《自粛警察》を行う彼らは、いわば義憤に駆られて、社会・公益のためと誤信して、それを実践しているように思える例も少なくない。しかし、まともな感覚からすれば、そのような思想性からは一種の狂気めいたものすら受け取ることができる。遂には、自らのそのような様子を動画サイトで公表して得意になる者まで出現した始末である。

様々な規制の渦中で、特に商店・飲食店などは、経済的あるいはそのほかの事情から、廃業を余儀なくされた事例も少なくないよし、聞き及んでいる。また、そのような状況などにも鑑みると、いわゆる《自粛警察》を行う彼らには、著しい想像力の欠如を窺うことができよう。想像力の欠如は、適正な判断力を鈍らせ、人々を不幸にさせようということである。そもそも想像力とは、知らないこと、触れたこともないことが、どのようになっているのかを思い描くことに他ならない。そのような乏しい想像力のなかで構築された、いわば《疑似

正義》あるいは《疑似倫理》とでもいえるようなものほど、かえって、社会・公益に害悪なものはない。

これは逆説的に聞こえるかもしれないが、そもそも筆者は、正義感が強すぎる人は、法学に向かないと考えている⁽²⁾。しかし、だからといって、正義感・倫理観の欠片もない人に向いているということでもない。それはというのも、法学の訓練においては、自らの主義・主張を理論的に説得性のあるものとするばかりではなくて、そのアンチテーゼについてさえも同様の作業を行うことを要求されることがあるからである。その際には、個人としての主義・主張を、一旦、棚上げ、あるいは、御破算——部分的にであれ——にする覚悟が必要となる。元々の正義感が強すぎる人にとっては、これが精神的にかなりつらい。

しかしながら、そのような訓練は、むしろ本来的に自分が持っている思想や価値を精緻化させる契機となる可能性すら、その実、内包させているのである。かつまた、それは教養としての法学の意義にも数えることができるといってもよい。そのような何らかの訓練——それは法学以外によってもありうるかもしれないが——による精緻化を経ずに、独善的な正義感・倫理観を居丈高に押し付けようとすることは、かえって真に不正義性・背倫理性の高い行為となるわけである。さきに示した《自粛警察》は、その好例であろう。

想像力の出発点は、多くの場合、各人の既存の知識・経験から始まる。そうしたゆえにも、学問あるいは教養とは、必ずしも即物的な職業的必要のためにのみ存在するものではない。むしろ、大学教育の本義は、そうした教養感覚の涵養にこそあるといってもよい⁽³⁾。そういう意味においても、暗黒の3年間を乗り越えた学生諸君には、いっそう、本学での、実りあるキャンパスライフを送ってほしいと願ってやまない。

⁽¹⁾ 当時のマスクは、《ウィルス》による攻撃ばかりでなく、独善的な倫理観・正義感をもつ《人》からの攻撃を防ぐものとしても、コロナ禍時期の半ばあたりから皮肉にも機能するようになってしまっていた。

⁽²⁾ これとほぼ同趣旨のことが『教授の授業』というウェブサイトの法哲学者・大屋雄裕に対するインタビュー記事にも掲載されており、筆者もこの内容におおむね賛同できる。大屋雄裕に対するインタビュー記事「正義の人は、法学部に来てはいけない」(ウェブサイト『教授の授業』掲載)(http://www.enjoyment.jp/prf/keio/ohya_takehiro/index.html [最終閲覧 20240531])。

また、筆者は別稿において「……「正義感」の強すぎる者、あるいは、適切でない／熟練されてない「正義感」を持ち合わせている者は、法学に対する適性を著しく欠く」と述べたが、その趣旨の一端は、本稿において示したことでもある。拙稿「《教養としての法学》における論理形式と理念の要諦——法学方法論に関する考察も兼ねて」天理大学 総合教育センター紀要 22[2023 年度]号(2024 年刊予定)における註(40)参照。

⁽³⁾ J・S・ミル(竹内一誠 訳)『大学教育について』(岩波書店、2011 年)12-14 頁参照。

ローカリーアクト天理 SDGs 「森に生きる」

フィールドワーク講評

近畿大学・理科教育 佐竹 靖

「森に生きる」(新科目名「ローカリーアクト天理 SDGs 森に生きる入門編」)では、福住から八つ岩を経由して、桃尾の滝へと下るルートを歩いた。私は主に地質と地形を案内した。

八つ岩は、石上神宮の奥の宮として知られる。地質学的にいうと山頂に巨石がゴロゴロとある場合は、風化によって取り残された「コアストーン」であることが多い。大国見山の山頂付近は花崗岩や閃緑岩でできており、マグマが冷え固まる過程で節理という規則正しい割れ目が生じる。その割れ目に沿って風化が進みやすいため、同じような大きさの巨石が残るのである。この巨石たちは、ここに至るまでにおよそ8千万年という時を経ている。私は、この巨石を前に悠久の時の流れと大地の変動の歴史を感じてただ興奮しているのだが、学生たちは手を合わせている。人々はなぜ巨石を崇めるのか(崇めたくなるのか)?その存在に、人は人知を超えた何かを感じるのかもしれない。また、巨石を通して自然と対話しているのかもしれない。何かを後世に残そうとしたとき、人は岩に刻む。変わらず存在する象徴として岩があるのかもしれない。そんなことを考えさせられ、私も手を合わせていた。

八つ岩周辺では、磁性を調べる実習を行った。小型軽量の磁石を糸で吊したものを近づけるといふ古典的手法であるが、これが一番よくわかる。学生たちは楽しんで調べていた。花崗岩に磁鉄鉱という鉱物が含まれるとよく引きつけられる。通常、山陽地方以南に分布する花崗岩には、磁鉄鉱が含まれない。しかし、不思議なことに少しだけ引きつけられる部分があった。もしかすると落雷の影響で磁化されたのかもしれない。

このように、科学で語られる部分と人の感覚や感性で語られるものが八つ岩にはあった。

道中に、石英や黒雲母、長石などの大きな結晶が出てきたり、一つ一つ岩石の種類を確かめたりしていくうちに「中学校で習った岩石の学習がやっとつながった」という声が聞こえた。本当に、身近な山に習ったコトがあることに気づき、モノを手にすることで初めて実感されたのではないかと思う。これが、本当に腑に落ちる理解ではなかろうか。



私は、1つの変わらない想いを持ってフィールドワークを案内している。それは、「自分と自然とのつながりを取り戻してほしい」という願いである。岩石だけでなく、水や植物、動物、何でもよいが、よく見て触れることで私と自然とのつながりを感じる機会になればと思う。これが、地域の見方を変え、価値観を変容させることでローカリーアクトのあり方を変えるのではないかと思う。

心の健康法 21 「マイペース」と「マイスペース」を大切に！

総合教育センター 仲 淳（臨床心理士）

梅雨どき。みなさんはどのように過ごされていますか？

雨の日が多くて外に出づらいですし、湿度が高くてジメジメするし、明るい太陽が出てきてくれないので、暗くなって、気分も落ち込みがち。。

「梅雨はうっとうしい！」「梅雨なんてなかったらいいのに！」と思いますよね。。

でも、生きてると、まわりのゴタゴタグジグジに巻き込まれたり、思いがけないかなしい出来事に出会って、心の中が土砂降りの雨になってしまう、ということもあります。

では、そういうときをどうやって過ごしたらいいのか？ということなのですが、ここで、梅雨どきのスター、カタツムリさんの生態について紹介をさせてもらいたいと思います。



まず、カタツムリの移動スピードですが、人に比べたら、極めてゆっくりですよ。でも確実に、カタツムリ自身の「ペース」で、行きたいところに移動していているわけですね。

そして、これが意外に知られていないのではないかと思います。梅雨どき以外って、カタツムリたちは一体どこにしているのでしょうか？みなさんは知っていますか？

実は僕も去年の秋まで知らなかったのですが、カタツムリは秋口にも、冬に備えてエサを食べるために活動的になって出てくるようなのですが、寒くて乾燥する冬の間は、殻の入り口に膜を張って、落ち葉などの下に隠れて冬眠をしているそうです。そしてなんと、暑すぎる夏の間も同様に、涼しい木陰などにひそんで夏眠（かみん）をしているのだそうです！！

ダメなときは殻の中という安全な「スペース」に身をおいて、自分を守っているのですね。

現代は、「早く、早く！」と急かされることが多いですし、情報の洪水の中で、人の目もすぐ気になってしまう時代なのですが、カタツムリさんのように「マイペース」と「マイスペース」を大切にしながら、じっくり無理せず、「自分らしく」いきたいものですね。

編集後記 今回も皆さんの心にじんわりと沁みる
いい物をお届けできたのではと・・・手前味噌w
次号もご期待ください。（杉）

CRADLE(クレードル) 第26号 2024年6月発行

発行者 上田 喜彦 天理大学 全学教育推進機構

編集 仲 淳 杉本 めぐみ

〒632-8510 奈良県天理市柚之内町 1050 電話 0743-63-7092（内線）6111

印刷 天理大学 DPセンター